

A Vocabulary of the Shanghai Dialect における 用字用語について

張 厚泉

要旨：19世紀半ば頃の中国では、外国人による英華字典など中国語教育に関係する書籍が数多く作られた。中でも特筆すべきは中国の方言に関する文法、語彙、教材などの資料である。そのうち、J.エドキンズ著の『*A Vocabulary of the Shanghai Dialect*』はもともと早く出版された上海方言の語彙集である。本稿は、方言の角度で当該語彙集の漢字、語彙の字音特徴について考察したものである。その結果、当該語彙集は上海方言の漢字「白読」で編集された言語資料であり、新漢語の上海方言の字音特徴を研究する上で参照の価値があることなどの結論が得られた。

キーワード：エドキンズ 上海方言 語彙 俗字 文読 白読

1. 序言

上海は「魔都」と言われ、その独自の文化的特徴にはモダンなイメージがある。その歴史は五千年以上と長く、敦煌、寧波、福州と並ぶ古い町で、中国の第二回歴史文化名城として中国政府に認定されている¹。元の時代に上海県が設置され、明の時代に規模が拡大され、清朝のとき、南匯県と川沙県が設置され、近代の上海の雛形が出来上がり、新中国が創立された前後に、幾度かの行政区画の変化を経て、現代の上海となった。上海方言は「呉語」²の重要な一種であり、上海語とも言う。

一方、アヘン戦争後の『南京条約』（1942年）で、上海には列強により租界が設定された。広州より後に開港したにもかかわらず、多様な面において西洋文化からの影響が大きく、その地理の対外的優位性から国際的な大都会となった。太平天国の動乱で、上海周辺の中国人は避難のため、上海の租界に移住して駆け込んできた。次第に寧波人はフランス租界（黄浦区中心）に、広東人は虹口周辺に、江蘇省北部の人々は閘北地区に集中するようになり、出身地によって居住地域が自然に分かれ、各地にそれぞれ独自のコミュニティが形成されてきた。地方出身者が多数移住してきたことで、上海方言は大きな影響を受けることとなる。これらの地域の上海語は、他の方言と同様、方言の訛りを帯びる結果となった。

¹ 中国国務院 1986年12月8日批准。

² 上海語と蘇州語が代表的、上海市、浙江省の大部分、江蘇省南部などで話される言語である。

上海方言の研究は、外国人、特に欧米の宣教師によって布教と貿易目的で始められた。そのうち、J. エドキンズ (1823-1905、Joseph Edkins、艾约瑟。以下エドキンズ) が編集した『A Vocabulary of the Shanghai Dialect』(1869年初版。以下、『上海方言語彙』と記す) は上海方言による英華語彙集の嚆矢として知られている。游汝杰 (2002: 130) は、「这是最早的上海方言词典 (これは最初の上海方言辞典だ)」と述べている。

『上海方言語彙』が刊行される前には、すでにアメリカの宣教師である J. マッゴウエン (John Mac Gowan、瑪高温) 著の『上海話短語選』(『A Collection of Phrases in the Shanghai』1862年初版)³が出版されている。同書は日本国立国会図書館のサーチサイトで、「中国の言語——会話と慣用表現集」という注記が付いている⁴。

上海方言の学習媒体としては、文法書、辞書のほか、教科書も重要である。上記のマッゴウエンの『上海話短語選』のほか、御幡雅文が著した『滬語便商一名上海語』(上海日本堂書店、1878年初版) はもっとも古く、本格的な上海語テキストであるとされている。このテキストは何度も再版され、東京大学の総合図書館では1929年の版本も確認できた。同氏はまた、『華語跬歩』(1886年初版) という名著の著者でもある。同時期における三井物産などの日本企業の上海進出の実態を考えあわせると、「普通話」と呼ばれる標準語が普及する前の上海において、上海語テキストの需要が高かったであろうことは容易に想像できる。

このように、19世紀初頭から20世紀半ばまで、上海方言は極めて重要な中国方言であると同時に、国際的な方言でもあった。したがって、この時期の上海方言に関する研究は中国語の方言としての研究だけではなく、言語接触の研究においても重要な意義がある。

2. 『上海方言語彙』の成立背景

19世紀の初頭から、中国へ渡った欧米人の宣教師たちは布教と貿易のため、数多くの英華、華英字典を作った。そのうち、もっとも代表的な辞書は、年代順から次の三種がよく挙げられている。

R.モリソン『A Dictionary of the Chinese language』(3部6巻構成、1815~1822)

W.メドハースト『Chinese and English dictionary』(1847~1848)

W.ロブシャイド『English and Chinese Dictionary』(4部4冊構成、1866~1869)

ロブシャイドの字典について、森岡 (1965: 65) は、岩崎克己氏の『柴田昌吉伝』(一誠堂、1935年) を参考にしながら、英華辞書とその日本への影響関係を概観した上、「その大きさだけからいっても当時の日中両国によって画期的な大辞書であったとはいうまでもない」と指摘している。英華、英和辞書の研究はその後、飛田良文氏や荒川清秀氏、沈国威氏などによって、近代語と日中語彙の接触関係など多方面から研究が進められ、多くの成果が挙げられている。

³ 徐奕 (2015: 189) は、『上海方言習慣用語集』の訳語を用いている。

⁴ 日本語では『上海方言のフレーズのコレクション』と訳されている。

一方、方言の角度からみると、中国語の語彙研究はあまり進んでいないように思われる。清国がイギリスに『南京条約』を強いられた結果、「五口通商（五港通商）」、即ち、先に貿易港として開いた広州のほか、福州、厦門、寧波、上海が開港せざる得なくなった⁵。さらにその後、清米『望厦条約』（1844年）、清仏『黄埔条約』（1844年）などの不平等条約を矢継ぎ早に強いられたのである。特に『黄埔条約』の第22条には、「教会、病院、救済院、学校、墓地」を作ることができる」と規定され、第24条には「フランス人は中国人に中国語を教えてもらうことができる。また、フランス語を学びたい中国人にフランス語を教えることもできる。フランス語の書籍を販売することもできれば、中国語の書籍を買うこともできる」と記されている。これによって、通商だけではなく、布教の自由も認められることになり、外国語辞書の需要が一気に高まり、その結果、「五港」所在地の方言による英華字典が続々刊行されるようになったのである。当時、地域ごとに官話（例えば、マンダリン）という共通語が存在していたが、知識人以外の圧倒的多数の労働者は官話が使用できず、方言しか使用できなかった。上海も例外ではなく、上海方言の英華字典が必要だとされたことは、こうした社会状況の背景からであった。

游汝杰（2002：122）は、19世紀中葉から20世紀30年代までの西洋宣教師による方言語彙・辞典から108冊を取り上げて調査している。このうち、上海方言の資料が10種以上、確認できる。一方、宮田（2010：215）は、モリソンの『五車韻府』（1865年）を上限とし、初版が1900年までに発行されたものを下限として、国立国会図書館と東洋文庫に保管されている55種の英華・華英字典と語彙集のうち10種を取り上げ、「使用言語」を含む11項目を立てて、書誌的解説を加えた。そのうち、五港の所在地の方言で編集された辞書は18種類あるが、その中から、以下に6種を挙げる。

1. 廣東省土話字彙 Vocabulary of the Canton Dialect, Robert Morrison. 1828
2. （福建方言辞典）A Dictionary of the Hok-Keen Dialect of the Chinese language, Walter Henry Medhurst. 1832
3. 翻訳英華厦腔語彙（厦門語） Anglo-Chinese Manual with Romanized Colloquial in the Amoy Dialect, Elihu Doty. 1853
4. 英華字典（官話、広東語） English and Chinese Dictionary with the Punti and Mandarin Pronunciation, Wilhelm Lobscheid. 1866-69
5. （上海方言語彙）A Vocabulary of the Shanghai Dialect, Joseph Edkins, 1869
6. 字語彙解（寧波語・官話） An Anglo-Chinese Vocabulary of the Ningppo Dialect, W.T. Morrison. 1876

上記の6種の資料のうち、2と5には中国語のタイトルがないため、括弧内にその慣用名を示

⁵ アヘン戦争以前、広州、厦門、寧波には海関が置かれていたが、外国との貿易港は広州だけだった。

した。3と4と6の括弧内の説明は、筆者によるものである。また、1の「廣東省土話字彙」の英文の Canton Dialect は、「広東方言」の意味であるが、書名が「廣東省土話」になっている。

3. 『上海方言語彙』の用字用語の特徴

『上海方言語彙』は、1868年再版の『A grammar of colloquial Chinese, as exhibited in the Shanghai dialect』(『上海口語語法』1853年初版, 1868年再版)の語彙集として墨海書館(London Missionary Society Mission Press)から刊行されたものである。再版の序言で、著者のエドキンズは次のように記している。

This little work is intended as a brief manual to accompany a grammar of the Shanghai dialect recently republished. The original purpose was to bind it with that work, but at the instance of the publisher it is now issued separately.

この小さな仕事は、最近再発行された上海方言の文法書に附するための簡潔なものである。最初はそれらをセットにする予定だった。しかし、出版社の意向で、今のように別々に出版した。

その『上海口語語法』については、田佳佳(2004)の『艾約瑟《上海方言語法》(1868年)研究』、顧欽(2007)の『語言接觸對上海市區方言語音演變的影響』、王一萍(2014)の『19世紀上海方言動詞研究』、张海英(2015)の『英国來華傳教士艾約瑟的漢語研究』などで研究されているが、いずれも修士か博士の学位論文である。上記の論文は、上海方言の音声と文法の研究に重点がおかれているが、このうち、王一萍(2014)では第一章の「緒論」で『上海方言詞彙集』を取り上げて概観しており、同語彙集の define、express、say explicitly、narrate といった語の訳語がいずれも「話明白/ (明白に話す)」という訳語の後に、さらに異なる説明を加えたが、同じページでないため、分かりづらいと指摘している。また、路遥(2011)の『美国傳教士教育家卜舫濟《上海方言教程》研究』は、ホークス・ポット(Francis Lister Hawks Pott)編の上海方言の教科書についての研究である。それ以外には、単語レベルの研究はあるが、『上海方言語彙』についての研究は管見の限りほとんど見当たらなかった。

上海方言の漢字表記と発音は、官話⁶と比べていくつかの特徴がある。まず、官話の漢字で表せる場合は、その漢字を「本字」といい、該当漢字がなく、漢字の音を借りて用いる漢字は「俗字」という。例えば、同じ「ひと」を表すのに、「人」は「本字」で、「寧」は万葉仮名のように、[niun]の音だけを借用する「俗字」である。

次に、同じ「本字」でも、発音が官話と似ている場合と、似ていない場合がある。似ている場合は「文読」「読書音」といい、新しい言葉に用いられることが多い。似ていない上海方言の発音は「白読」「白話音」といい、日常生活で定着している話し言葉が多い。「文読」と「白読」は、日本語の漢字の字音・字訓の別のように、ヤヌス(古代ローマの神で前と後ろ二つの顔を持つ)

⁶ 今でいう「普通語」という標準語がなかった時代を記述する場合に、「官話」を用いる。

のような二面性を持っている。

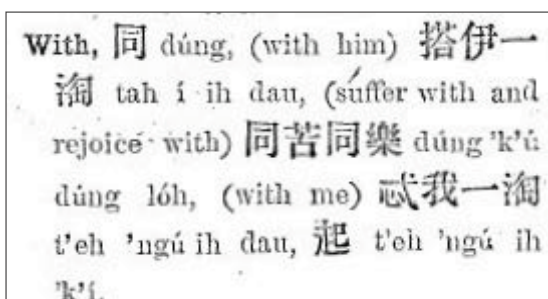


図1：上海方言の俗字（搭伊一淘/彼と一緒に。忒我一淘起/私と一緒に行く）

表1：上海方言の漢字の「文読」と「白読」

人 普通話（標準語） [ren] [niun]	文読[ren]	人民
	白読[niun]	大人，外国人
大 普通話（標準語） [dà] [dài]	文読[da]	大学（大学）、大世界 大吃大喝（やたらに飲み食いする）
	白読[du]	大閘蟹（上海ガニ）、大小 大鱼大肉（魚や肉などのごちそうがいっぱいある）

また、図1と表2で示されているように、上海方言は「俗字」が多く、発音も官話とかなり異なっていて、学習しない限り、ほとんど通じないことが分かる。

表2：現代上海方言の漢字表記と発音（人称代名詞、親類等）

上海方言	発音	中国語	日本語
我、吾	WU	我	私
阿拉	ALA	我们	私達
儂	NONG	你	あなた
那	NA	你们	あなた達
伊	YI	他、她	彼、彼女
伊拉	YILA	他们	彼ら
人，寧	NING	人	人
撒宁	SA NING	谁	誰
阿爸/爷	YA/ABA	爸爸	お父さん
姆妈/娘	MNMA/NIANG	妈妈	お母さん

兒子	NIZI	儿子	息子
囡兒	NHOENG	女儿	娘

19世紀までの中国の労働者階層は、官話を学習する機会はほとんどなかったため、官話に通じない中国人は少なくなかった。この辺りの事情について、宮田(2010:63)は次のように指摘している。

従来の辞典は、1828年刊行のモリソン『広東省土話字彙』*Vocabulary of the Canton Dialect* 以外はすべて官話を対象としたものであった。中国本土をおとずれたことのない著者の交流の相手は、官界のひとつとはなく、南部に移住してきた中下層階級にかぎられていた。そうした人びとは官話についてはまったく無知であり、かなりの地位の知識人さえ、官話の修得にみきりをつけ、官界進出をあきらめることもあった。

官話ができないのは中低層の中国人だけではなく、読書人すらできないことも珍しくなかった⁷。そのため、より幅広く布教と貿易を進め、中低層の中国人と接触するために、方言の文法・語彙の教材開発や辞書作りが必要となったわけである。

『上海方言語彙』は19世紀中葉の上海語や中国語の語彙を記録した初めての文字史料として、方言研究において重要な位置を占めている。

『上海方言語彙』では、著者の序文に続き、4ページの上海方言の音節表記の説明が付いている。本文は151ページで、1ページには40語前後、計5,753語が収録されている。見出し語はアルファベット順で縦2列に並べられ、「英語-中国語-発音」のような、今の辞書と変わらないような配置であるが、品詞の種類は示されていない。

また、「Lotus, 荷花 húhwó, 蓮 lien hwó.」のように、紙幅を節約するためか、既出した漢字「花」を省略し、その省略した漢字の音節 [hwó] のみが示されているという特徴が見られる。

Lotus, 荷花 hú hwó, 蓮 lien hwó.

図2：漢字の省略

しかし、こういった特徴以上に、本稿が重要視しているのは、その対訳語としての上海方言の語彙構成である。それを明らかにするためには、「本字」(さらに「文読」と「白読」の別)と「俗字」の語彙数を突き止めなければならない。そのため、上海方言と官話の語彙数や、読みのパターンの把握が必要になる。また、一部の訳語には、蘇北方言か寧波方言と思われる発音も見られたため、訳語に限って言えば、寧波方言の話者の理解語彙数が、上海方言の話者のそれより多い

⁷ 康有為は『教学通議』「言語編」においても、「雍正八年(1730), 以閩、廣人不通官話, 令于四城開正音館教之, 著令舉貢生童不能官話者, 不准考試, 以三年為限。十一年, 再展限三年。」と記している(劉夢溪, 《中国現代學術經典康有為卷》, 石家庄: 河北教育出版社, 1996年100頁)。

と考えられる。しかし、それを実証する必要がある。実証するためには、量的な調査をする必要がある。したがって、以下のように、母語話者の別を意識して人選を定め、作業を進める方法を取った。

表 3：調査協力者及び母語情報

調査協力者	母語	家庭の言語環境	役割
(1)S さん (上海人)	上海生まれ上海育ち	両親は北方出身、周りには寧波人が多い。	規準、判断
(2)N さん (寧波人)	寧波周辺の出身上海方言も理解できる。	上海周辺の言語	寧波の字音
(3)K さん (西安人)	陝西省か河南省の出身。上海、寧波方言はできない。	陝西省か河南省地域の言語	非上海方言のデータ

上記の3人のうち、S (上海人) のデータを基礎データとして、N (寧波人) と K (中原人) のデータと比較する。つまり、S が訳語に上海方言以外の訛りがあると感じれば、その訳語をふるい落とす。N は寧波出身のため、理解した語彙を抵抗なく計上する。一方、K は、上海方言も寧波方言もできないため、理解語彙数がかなり低くなり、上海方言をふるい落とす役割を担える。このうち、一番重要なのは、S と N のデータの差である。例えば「電」という漢字の発音は、上海方言では[di'ki']と発音するはずであるが、エドキンズの『上海方言語彙』には、「Electricity, 電気 dien'ki'」⁸の発音のように、蘇北方言か寧波方言と思われる語彙が混じっているからである。S と N のデータの差は、非上海方言の語彙数を示す目安となる。

各ページの訳語を数えた結果、訳語の延べ語彙数は 11,489 語で、S と N の理解語彙は、それぞれ 9,372 語と 10,697 語であった。S と N の理解語彙の差、即ち、上海方言以外の方言は 1,325 語あり、全体の 11.5%を占める。図表を見やすくするため、任意のサンプルとして 1~51 ページのデータを小計し、「方言話者による訳語の延べ語彙と理解語彙の比較図」を作成した。その結果、訳語の延べ語彙 4,042 語のうち、S と N の理解語彙は、それぞれ 3,270 語と 3,665 語で、N の理解語彙は S より 9.8%上回っており、図 3 が示すように、寧波話者の理解語彙数が最も多いという結果が出た。

⁸ 上海方言は[di'ki']と発音するはずである。蘇北方言は「没有電了」は、[ma de dien le]という。

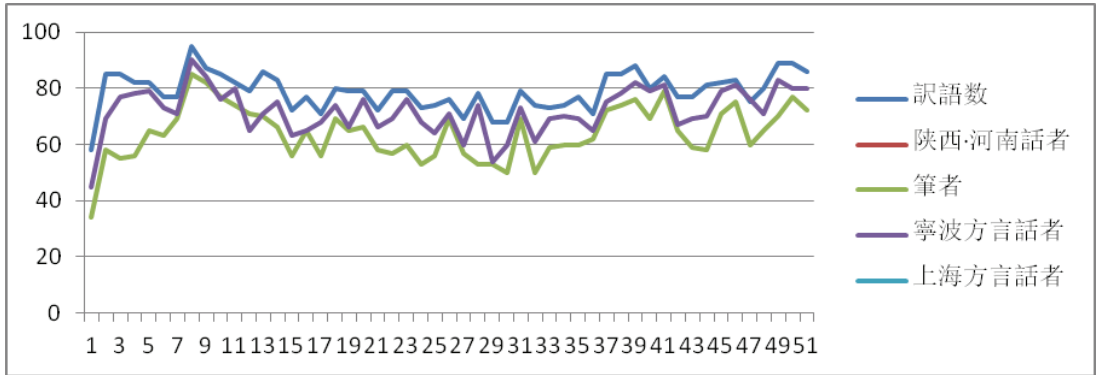


図3：方言話者による訳語の延べ語彙と理解語彙の比較

全体的に見ると、図表で示したように、寧波話者の N の語彙数が上海話者の S より多い。しかし、なぜか 12 ページだけが、N より S のほうが高くなっているという意外な結果が出た。これはどういう理由によるものか、調べた結果、Cabbage や Camphor の訳語によるのではないかと考えられる。図4で示したように、Cabbage の訳語の「山東菜」や Camphor の訳語の「冰片」は、N が理解しない語である。「山東菜」は現代中国語では「山東料理」の意味であるが、それが誤訳かどうかともかくとして、少なくとも今は Cabbage の訳語としては使えない。しかし、S は日本語の「山東菜」を知っているため、理解語彙として計上したのである。「冰片」も死語に近い言葉だが、S はそれを計上したのである。このように 12 ページだけ S の理解語彙が多くなったのである。

<p>C Cabbage, 黃芽菜 <i>wong ngá t'sé'</i>, 山東菜 <i>san t'ung t'sé'</i>.</p>	<p>Camphor, 樟腦 <i>tsong 'nau</i>, 冰片 <i>ping p'ien</i>, (tree) 香樹 <i>h'iang zú'</i>. Can, (permissive) 可以 <i>'k'ó 'i</i>, (physical ability) 能 <i>nung</i> (acquired)</p>
--	---

図4：Cabbage の訳語

語彙論の観点からいくつかの語彙の体系性を調べてみると、いわゆる「こそあど」系に当たる指示詞と疑問詞は次のようになり、ほぼ「俗字」が当てられていることが分かる。

表4：「こそあど」系の俗字音

分類	上海方言 (俗字)
This	第 <i>di</i> , 個 <i>dikú</i> , 得 <i>tuhkú</i>
That	伊個 <i>ikú</i> , 故 <i>kúkú</i>
These	第個 <i>dikú</i> ,
Those	(men) 伊個 <i>ikú'niun</i>
Here	此地 <i>tsz di</i> , 第頭 <i>di deu</i> , 答 <i>di tah</i> 堂 <i>di dong</i>

There	故答 kutah, 故個戸堂 kukohudong
Which	那裏一個 `á`liihkú`
Where	那裏`á`li, 勒拉 leh la`á`li
Whose?	啥人個 sá `niunkú`

人称代名詞についても、一人称の「我」「吾」以外は、すべて「俗字」であるが、見出し語が欠けているため、体系性が損なわれている。つまり、同文法書のほうも、それらの文法項目を扱っていないということになる。(表 5)

表 5 : 人称代名詞

	单数					複数				
	主格	目的格	所有格	所有代名詞	再帰代名詞	主格	目的格	所有格	所有代名詞	再帰代名詞
一人称	I	me	my	mine	myself	we	us	our	ours	ourselves
	我 ngú, 吾 ngú.	—	我個 ngúkú	我個 ngúkú	自己 zzki, 家 zzka, 親身 tsing sun.	我你 ngúni	我侬 ngúni	—	—	—
二人称	you		your	yours	yourself	you	your	yours	yourselves	
	儂 núng, 那 na, núngna		儂個 núngkú, 那個 nakú	—	—	—	—	—	—	—
三人称	男性	he 伊 i, 是其 zzgi, 其 gi	him 伊 i, 是其 zzgi,	his 伊個 ikú, 伊自家個 izzkákú,	himself 伊自家 izzká, 親自 tsingzz	they 伊 i, 是伊 zzi, 其	them 伊 i, 其 gi	their 伊個 ikú, 拉 ila ko	theirs —	themselves —

						zzgi				
女性	she 伊 i.	her 伊 i,是其 zzgi,其 gi		hers —	herself —					
中性	it 伊 i, 故個物事 kúkú meh zz		its —		itself 伊自家 izzká,					

宗教語彙に関しては、「God,上帝、天主、真神、神、鬼神、神明菩薩」、「Church,教会、会堂」、「Scriptures, 聖經、聖書」などがあるが、曜日に関しては、「Sunday, 禮拜日 li pányih, 主日 tsunyih」しかないというのは意外であった。

また、近代西洋の抽象概念を表す語彙は少なかった。Free があっても、Freedom や Liberty、Democracy はなかった。さらに、Independent は、「自家作主 zz'kátsok'tsū, 自管自 zz'kwézzz'」（自分で決める、自分のことを自分で管理する）の意味で訳されている。「人」に関しては、「男人」「女人」「人民」のような言葉がまだ確認できず、「人」の「文読」はまだ現れていなかったようである。これは「聞」にも同じことが言える。現代上海語では、「新聞」の「聞」は「文読」として、「wun/wen」と読むが、この語彙集の表記を見る限り、まだ「匂いを嗅ぐ」の「聞」と同じ発音で、「vun」になっているのである。

表6：新漢語と「本字」の「文読」

Independent	自家作主 zz'kátsok'tsū, 自管自 zz'kwézzz'
Man	人 niun
Woman	婦女'vú'nū
People	百姓 pák sing, 民 ming.
News	信息 sing sih, 聞 sing vun, 消息 siausih
Newspaper	新聞紙 sing vun' tsz
Smell	聞 vun, 噴 p'un

4. 終わりに

『上海方言語彙』の研究を通し、19世紀中葉の上海語の輪郭をかなり捉えることができた。特によく言われている「本字」の「文読」がほとんど見られなかった点においては、当時、まだ新漢語が少なかったからだと指摘できる。「民主」や「自由」はもちろん、「人民」もまだ生まれていなかった。「新聞」は新漢語とは言えるが、「人」も「聞」も、その読みには「白読」の発音

しか見られなかった。このように、上海方言の「本字」の「文読」は少なくとも 19 世紀末以降、抽象概念がたくさん作られ、用いられるようになるまで待たなければならなかったという作業仮説を得たと考える。これは新漢語形成の歴史とも一致しているのである。

『上海方言語彙』は辞書という角度で検証すれば、あれこれ、いろいろ不備があったであろうが、これはタイトルが DICTIONARY ではなく、VOCABULARY であったことから見て、エドキンスも分かっていたはずである。また、当初は単独の形で出版するのではなく、『上海方言文法』の付録として刊行する予定だったことが序文からも看取できる。しかし、見出し語の 5,753 語という語彙量は、英語の 90%以上が理解できると言われている語彙学の視点から、中低層向けの語彙集として十分、用を足すことができる。また、延べ語彙、1 万語以上という 19 世紀の上海方言の漢字と発音のデータは、上海方言の研究として第一級の貴重な資料であることは言うまでもなく、「児」「杏仁」などのように、日本語漢字の呉音との対照材料にもなり得る。さらに振り返れば、御幡雅文など日本人が編集した上海方言のテキストの語彙研究はこれまで等閑に視され、日本の学究により研究業績も筆者も調査ではごく限られていた。その一方、東西外国人による上海方言の記録の比較研究は、上海方言への貢献が西洋の宣教師によるものだけではなく、政治・経済・文化の各方面からの要請による実用上海語の研究が言語学者によって盛んになされ、この方面の研究に広大な領野を残していることが知れるだけでも斯学研究者として歓心に耐えない。

参考文献

日本語参考文献

Joseph Edkins: A Vocabulary of the Shanghai Dialect. Shanghai: London Missionary Society Mission Press 1869.

森岡健二「訳語形成期におけるロブシャイド英華字典の影響」、『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』Vol.19, 1965 年 61-102 頁

森岡健二・伊藤みゑ子「訳語形成期におけるロブシャイド英華字典の影響-2-」、『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』Vol.21, 1966 年 113-159 頁

沈国威『近代日本語彙交流史—新漢語の生成と受容—』, 東京: 笠間書院, 1994 年

宮田和子「メドハーストの諸辞典とその影響」、『或問』第 2 号, 2001 年 13-22 頁

宮田和子『英華字典の総合的研究—19 世紀を中心として—』, 東京: 白帝社, 2010 年

陳力衛・倉島節尚「19 世紀英華字典 5 種」、『或問』第 11 号, 2006 年 119-126 頁

徐奕「麥嘉温《上海方言習慣用語集》中所記上海話的羅馬字音系」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』Vol.60, 2015 年 189-200 頁

中国語参考文献

- 劉夢溪（主編）《中国現代學術經典康有為卷》，石家庄：河北教育出版社，1996年
- 游汝傑《西洋傳教士漢語方言學著作書目考述》，黑龍江：黑龍江教育出版社，2002年
- 錢乃榮《上海語言發展史》，上海：上海人民出版社，2003年
- 張西平《西方人早期漢語學習史調查》，北京：中国大百科全書出版社，2003年
- 上海通志編纂委员会《上海通志第1冊》，上海：上海人民出版社·上海社会科学院出版社，2005年
- 艾約瑟（Edkins）著，錢乃榮·田佳佳（訳）《上海方言口語語法》，上海：外語教学与研究出版社出版，2011年

修士・博士学位論文

- 田佳佳《艾約瑟《上海方言語法》（1868年）》（2004年上海大學碩士學位論文）
<http://www.docin.com/p-419308481.html> 2016/03/03 アクセス。
- 顧欽《語言接觸對上海市區方言語音演變的影響》（2007年上海師範大學博士學位論文）
<http://www.shangxueba.com/lunwen/v83001.html> 2016/03/03 アクセス。
- 路遙《美國傳教士教育家卜舛濟《上海方言教程》研究》（2011年上海師範大學碩士學位論文）
<http://www.docin.com/p-873901802.html> 2016/03/03 アクセス。
- 王一萍《19世紀上海方言動詞研究》（2014年熊本學園大學博士學位論文）
https://kumagaku.repo.nii.ac.jp/index.php?active_action=repository_view_main_item_detail&page_id=33&block_id=47&item_id=674&item_no=1 2016/03/03 アクセス。
- 張海英《英國來華傳教士艾約瑟的漢語研究》（2015年北京外國語大學博士學位論文）
<http://cdmd.cnki.com.cn/Article/CDMD-10030-1015582292.htm> 2016/03/03 アクセス。

中文摘要：19世纪中叶，由外国人编写的英华词典等汉语学习的书籍在中国应运而生。其中，特别值得一提的是有关中国方言的语法、词汇、教材等资料，而艾约瑟编著的《A Vocabulary of the Shanghai Dialect》是最早出版的上海方言词汇集。本文从方言角度对该词汇集的汉字、词语的字音等特征进行了考察，得出该词汇集是用上海方言汉字“白读”编纂的语言资料，对研究新汉语的上海方言的字音特征具有参照作用等结论。